

2023年4月30日 礼拝説教要旨

詩編講解説教146「愛は人を動かす」

詩編146：1～10、マタイ5：38～42

詩編第146編から第150編までの最後の5つの詩編は初めと終わりが「ハレルヤ」となっていて「ハレルヤ詩編」と呼ばれる一つのまとまりになっています。ハレルヤとは、ハレル(ほめたたえよ)・ヤハ(主)で「主をほめたたえよ」という意味の言葉です。150編の詩編は最後に「主をほめたたえよ」と言って締めくくられます。ここに詩編の最終的な目的があると申し上げてよいでしょう。またそれは同時にわたしたちの人生の目的を示しているとも理解することもできるでしょう。どのような人生も神さまをほめたたえることに向かっていると詩編は教えています。

「命のある限り、わたしは主を賛美し、長らえる限り、わたしの神にほめ歌をうたおう」(2節)
「命のある限り」という部分は「わたしの生涯」という言葉です。生涯のすべてにおいて主を賛美する。ですから良い時も悪い時も主を賛美するのです。パウロの書簡にある「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」(Iテサロニケ5：16～18)に通じています。それはわたしたちの賛美の根拠がどこにあるのかに依っています。では、生涯を通して神さまをほめたたえるその根拠とは何でしょうか。

「いかに幸いなことか。ヤコブの神を助けと頼み、主なるその神を待ち望む人」(5節)ここでは神さまへの信頼が歌われています。神さまはイスラエルを救われた神さまであり、世界をお造りになられた創造主です。そのお方を信頼すれば間違いはないということです。しかし実際はどうでしょうか。「君侯に依り頼んではならない。人間には救う力はない」(3節)ここにはこの世のものに依り頼む虚しさが語られています。「君侯」とはこの世の支配者です。それは神さまに造られたものに過ぎません。それを絶対化し、依り頼むことの虚しさがあります。ダビデは優れた王でしたが、彼も一人の弱さを抱えた人間であり、過ちを犯しました。そしてその思いは息子のソロモンには受け継がれませんでした。ソロモンは異教の神々を拝みました。そして国は分裂し滅びます。そして捕囚という決定的な出来事を経験するのです。イスラエルはそういった歴史を通して、この世のものに依り頼む虚しさを体験的に学びました。その経験を経て、神の民イスラエルはこの世のものは移りゆくけれども、神さまは変わらないお方であること、その神さまに依り頼むことが人間にとって最も幸いなことであると学ぶのです。

そしてそのことが6節の後半「とこしえにまことを守られる主は」という部分に強調されています。「まこと」(エメト)は詩編でも重要な言葉の一つです。詩編では「慈しみとまこと」という表現が繰り返されます。「慈しみ」(ヘセド)も神さまの不変の契約のことです。神さまがどこまでもわたしたちとの救いの約束を守られる。わたしたちが神さまを裏切ってしまうことがあっても、神さまは簡単に契約を破棄されたり、忘れてしまわれるようなことはありません。そこに神さまの慈しみが現れています。「まこと」(エメト)もそれゆえに神さまが真実なお方であることを意味しています。その真実なお方に依り頼むこと、その神さまを助けとし、待ち望むことが人間にとって真の幸いであると詩編は歌います。

このこともまたイスラエルは経験しました。「虐げられている人のために裁きをし、飢えている人にパンをお与えになる。主は捕らわれ人を解き放ち、主は見えない人の目を開き、主はうず

くまっている人を起こされる。主は従う人を愛し、主は寄留の民を守り、みなしごとやもめを励まされる。しかし主は、逆らう者の道をくつがえされる」(7～9節)ここに神さまがイスラエルを決して見捨てられなかったことが示されています。「主は寄留の民を守り、みなしごとやもめを励まされる」は捕囚で異国の地に連れて行かれ寄留の民となったイスラエルを神さまが守り励まされたこと。そしてついには「主は捕らわれ人を解き放ち」捕囚からの解放、帰還を果たしてくださったことが語られます。この神さまの約束に対する誠実さこそ、わたしたちがその生涯を通して神さまを信じ、神さまをほめたたえる根拠に他なりません。

そしてその神さまの誠実は、愛する独り子イエス・キリストを世にお遣わしになられたお姿に最もよく表されました。主の十字架とよみがえりによって、救いの約束をとこしえのものとしてくださいました。罪ゆえに虐げられ、飢え渴き、自由を失い、かがみこんでいるわたしたちをそこから解き放ってくださいました。それがキリストの救いです。この神さまの誠実、まことは何よりその愛から出てくるものです。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ3：16)その愛ゆえに、裏切ることはできない、見捨てることができない、手を差し伸べずにはいられないのです。

そのようにして神さまに愛されているわたしたちも、キリストにならい、その使命を果たすように招かれています。神さまの愛がわたしたちを動かして、神さまに対して、人に対しても誠実にあゆむことを可能にします。神さまのために、誰かのために尽くすことを可能にするのです。自分の中のちっぽけな愛がそれを可能にするのではなく、神さまの愛がわたしをそのように動かすのです。

時として、愛の業、善い業に生きることを諦めてしまうことがあります。裏切られるのではないかと躊躇したり、徒労に終わること、報われないことを恐れて愛に生きる勇気が損なわれることがあります。でもわたしたちは限りあるものの中から愛を注いでいるのではなく、とこしえに変わらない神さまの愛の中で生きています。だからこそ、惜しみなく愛に生きることができるのです。下着を取ろうとするなら上着をも与え、誰かが1ミリオン行くように強いるなら、さらにもう1ミリオン行くようにするのです。それは仕方なくするのではなく、喜んでするのです。口先だけではなく、このような愛を生き抜くことが日々神さまをあがめて生きるということです。

天の父よ。愛することに限界を覚えることがあります。自分のちっぽけな愛を振り絞るようにして、それでも愛せないことに悩む日々です。けれどもわたしたちにはイエス・キリストを通して、惜しみなく神さまの愛が注がれていることを信じます。わたしたちがその生涯を通して神さまをほめたたえ、その愛に生きることができるよう、わたしたちはキリストに結ばれ神さまから愛をいただいていることを覚えさせてください。あなたの愛に生きることができるよう。主の御名によって祈ります。アーメン。